

第11回全国貨物純流動調査（物流センサス）の調査結果（速報）

令和4年10月28日公表
令和4年12月20日訂正
国土交通省

「第11回全国貨物純流動調査」とは

貨物流動を捉えた統計は、各輸送機関に着目し、ある輸送機関がどこからどこまで輸送したかを調査した『総流動統計』が一般的ですが、全国貨物純流動調査は、貨物そのものに着目し、出発点から到着点までの貨物の動きを捉えた『純流動統計』として、全国を対象に輸送手段を網羅的に把握する実態調査です。

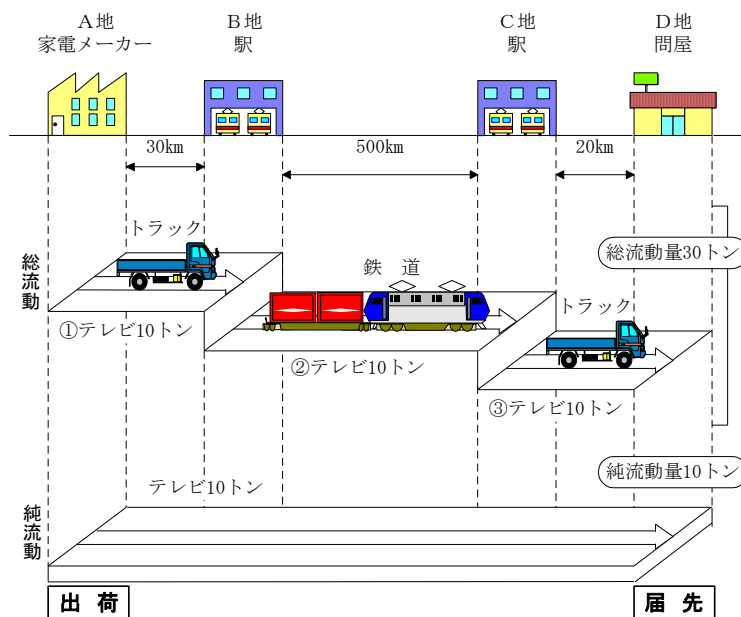
全国貨物純流動調査は、1970(昭和45)年以来5年毎に実施しており、2015(平成27)年の第10回調査から5年以上が経過し、物流構造も変化していることが予想されることから、2021(令和3)年に第11回調査を実施いたしました。

2021年調査は、全国の4産業（鉱業、製造業、卸売業、倉庫業）の貨物量を誤差率10%以内で信頼度90%の精度確保を目標としており、全国の約60万事業所から抽出した約6万5千事業所に対し、調査票を2021(令和3)年10月に配布し、約2万2千事業所から回収しました。なお、今回より電子回答を調査の主体といたしました。

調査項目が多岐にわたることから、回収した調査データについては回収後多面的な観点から補正、精査を行っています。また、調査データは、製造品出荷額（工業統計調査より）、商品販売額（経済センサスより）などの補助情報を用い、全国の約60万事業所の貨物量に拡大推計しています（本資料に示す調査結果の概要は、この拡大推計値に基づくものです）。

本資料は、2022(令和4)年10月時点において調査結果を速報として公表するものであり、今後も調査結果のとりまとめを進め、調査の詳細な結果・確定数値は改めて公表させていただきます（卸売業の母集団値を1%ほど更新する予定のため今回の速報値と確定数値とで差異が出るが見込まれる他、確定数値にあたり速報値から修正される可能性があります）。

純流動統計と総流動統計の概念の違い



純流動のOD表 (トン)

発地 \ 着地	A	B	C	D	計
A	-	-	-	10	10
B	-	-	-	-	-
C	-	-	-	-	-
D	-	-	-	-	-
計	-	-	-	10	10

総流動のOD表 (トン)

発地 \ 着地	A	B	C	D	計
A	-	10	-	-	10
B	-	-	10	-	10
C	-	-	-	10	10
D	-	-	-	-	-
計	-	10	10	10	30

1. 全国貨物純流動量

（1）産業別年間出荷量

4産業全体の出荷量の推移としては、2021年調査における全国貨物純流動量（2020年度の年間出荷量：23億2千万トン）は、2015年調査（2014年度の年間出荷量：25億3千万トン）に比べ約8.2%減少しております。これは、2010年調査から2015年調査の間の約2.4%減少に比べ大幅な減少となっており、コロナ禍に伴う影響が考えられます。

産業別の出荷量の推移（2015年調査～2021年調査）としては、倉庫業が15.4%の増加となっている一方で、鉱業は13.4%、製造業は9.6%、卸売業は13.0%の減少となっています。

注）全国貨物純流動調査では、通信販売等の小売業者による出荷貨物は調査対象になっていません。

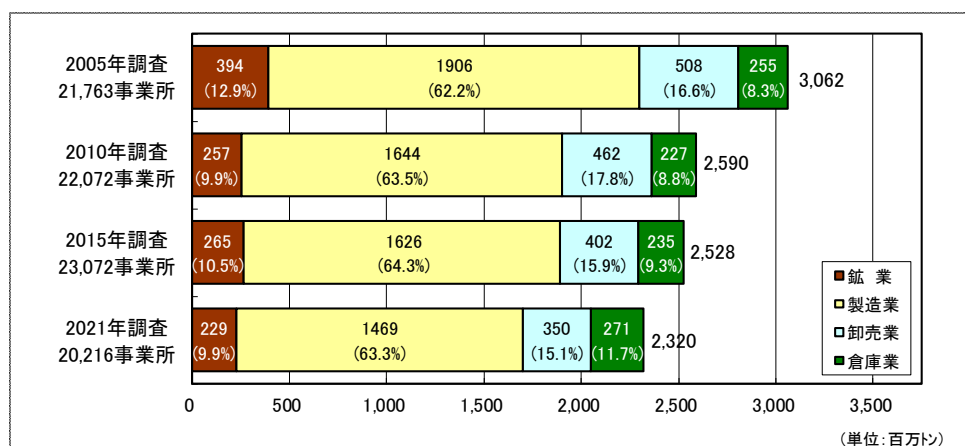


図1 産業別年間出荷量の推移

【図1～4の数値等について】

- ・事業所数：各年の年間輸送傾向調査においてご回答いただいた事業所数（回答が有効なもの。倉庫業は倉庫種別・所在市区町村で事業所分割した数）
- ・出荷量：上記回答結果に基づき、全国の全事業所（約60万事業所）から出荷される年間の貨物重量を推計したものの。

（2）年間出荷量の品類構成

年間出荷量の品類構成をみると、2021年調査は、化学工業品が35.1%と最も大きなシェアを占め、以下、鉱産品（21.0%）、金属機械工業品（16.9%）の順となり、この3品類で年間出荷量全体の73.0%を占めています。ここ4回の調査を比較すると、構成は大きく変わっていません。

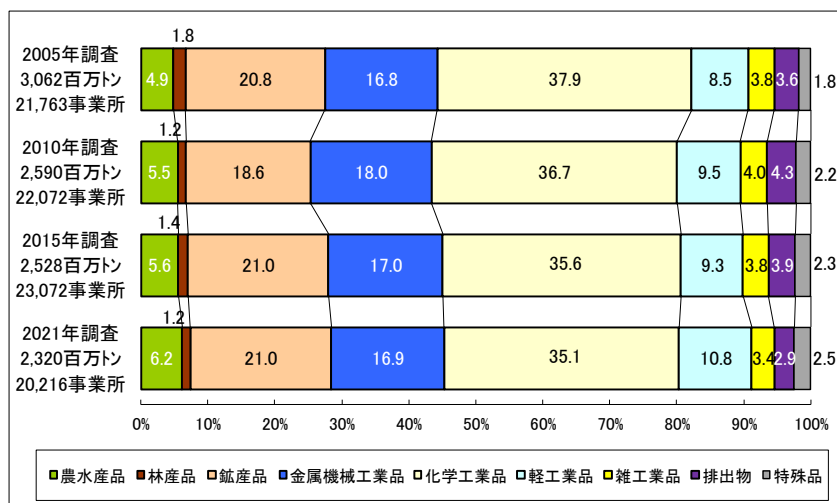


図2 年間出荷量の品類構成

（3）年間出荷量の発地域構成

2021年調査における年間出荷量の発地域（全国10地域）構成をみると、三大都市圏を抱える関東、中部、近畿発の貨物が全体の56.6%を占めています。

2021年調査における発都道府県別では愛知県が最も出荷量が多く、伸び率では福井県、熊本県、徳島県で高くなっています。

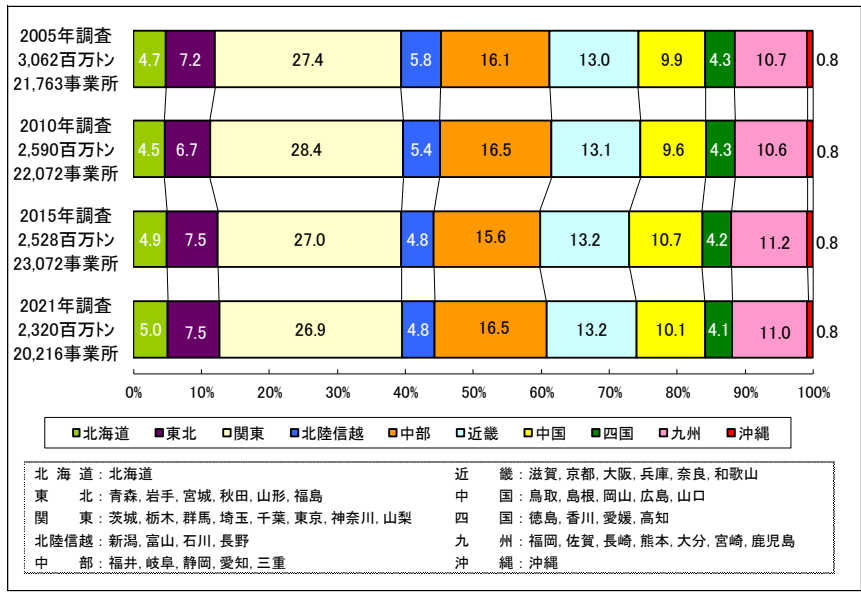


図3 年間出荷量の発地域構成

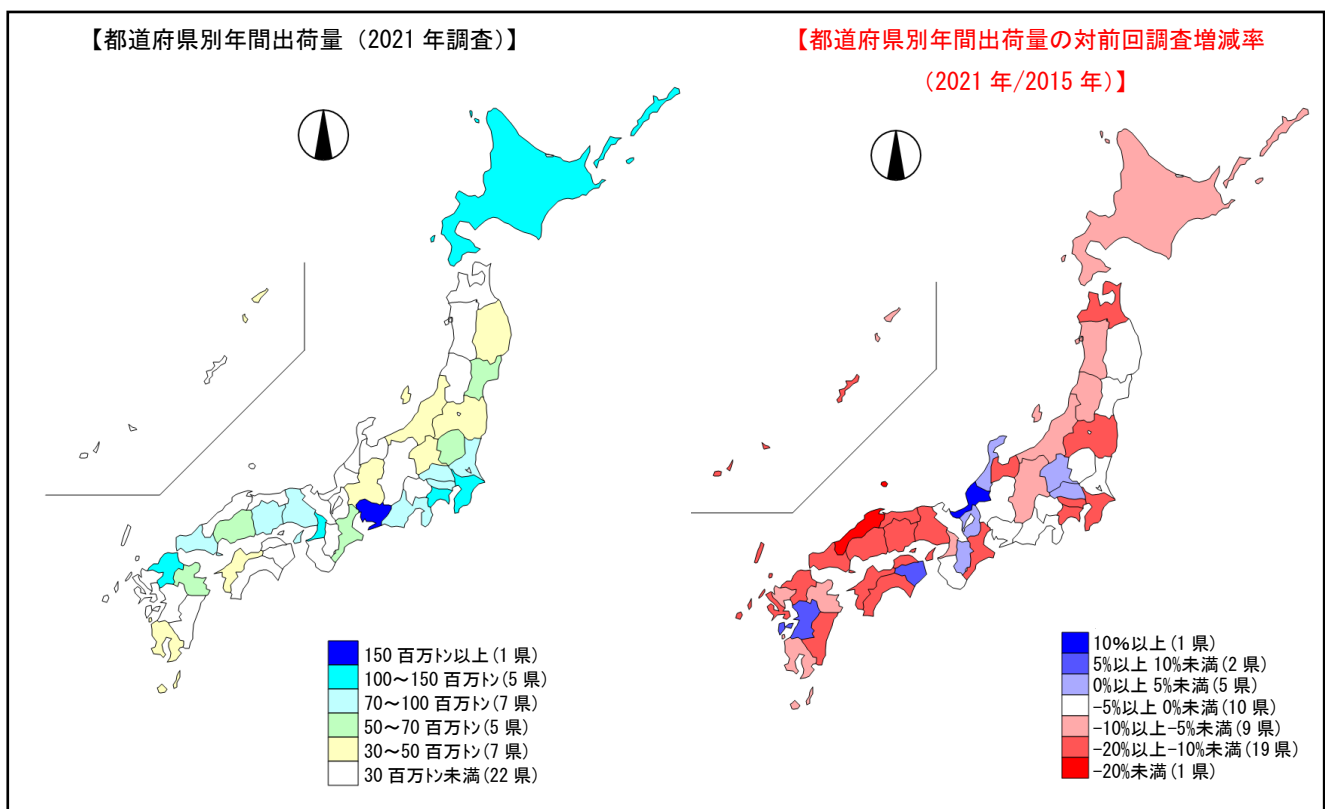


図4 2021年調査における都道府県別年間出荷量・増減率（2021年調査／2015年調査）

2. 地域内・地域間流動

2021 年調査における全国 10 地域の貨物流動量をみると、77.1%が地域内流動、22.9%が地域間流動となっています。過去からの推移をみると、関東地域内と九州地域内での地域内流動のシェアが拡大しています。地域間流動のシェアもわずかに高まっています。

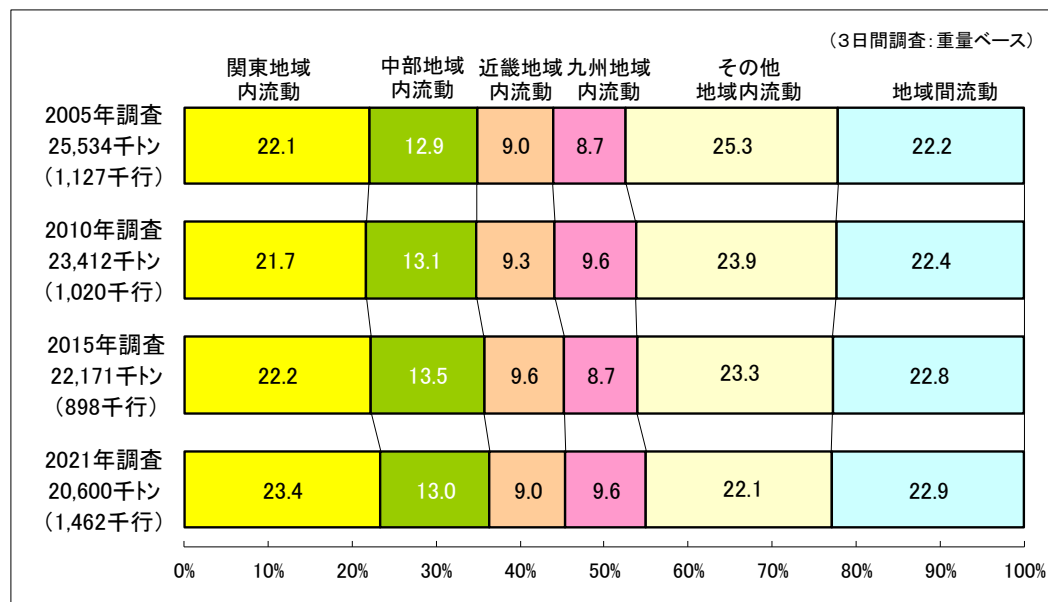


図 5 地域内・地域間流動の構成

その他地域：北海道・東北・北陸信越・中国・四国・沖縄地域

【図 5～図 12 の数値等について】

回答行数	3 日間流動調査票(巻末参照)における出荷のパターンごとに 1 行ずつ実績をご回答頂いた行数（単位：行）。※2015 年調査の速報時には「トリップ」と称していたが一般的なトリップの定義との誤解を避けるため名称を変更しました。
件数	3 日間調査の回答行数に基づき、全国の事業所（約 60 万事業所）から出荷される貨物の 3 日間の流動件数を推計したもの（単位：件）。
流動量	3 日間調査の回答行の重量に基づき、全国の事業所（約 60 万事業所）から出荷される貨物の 3 日間流動量を推計したもの。

第11回全国貨物純流動調査（物流センサス）の調査結果（速報）

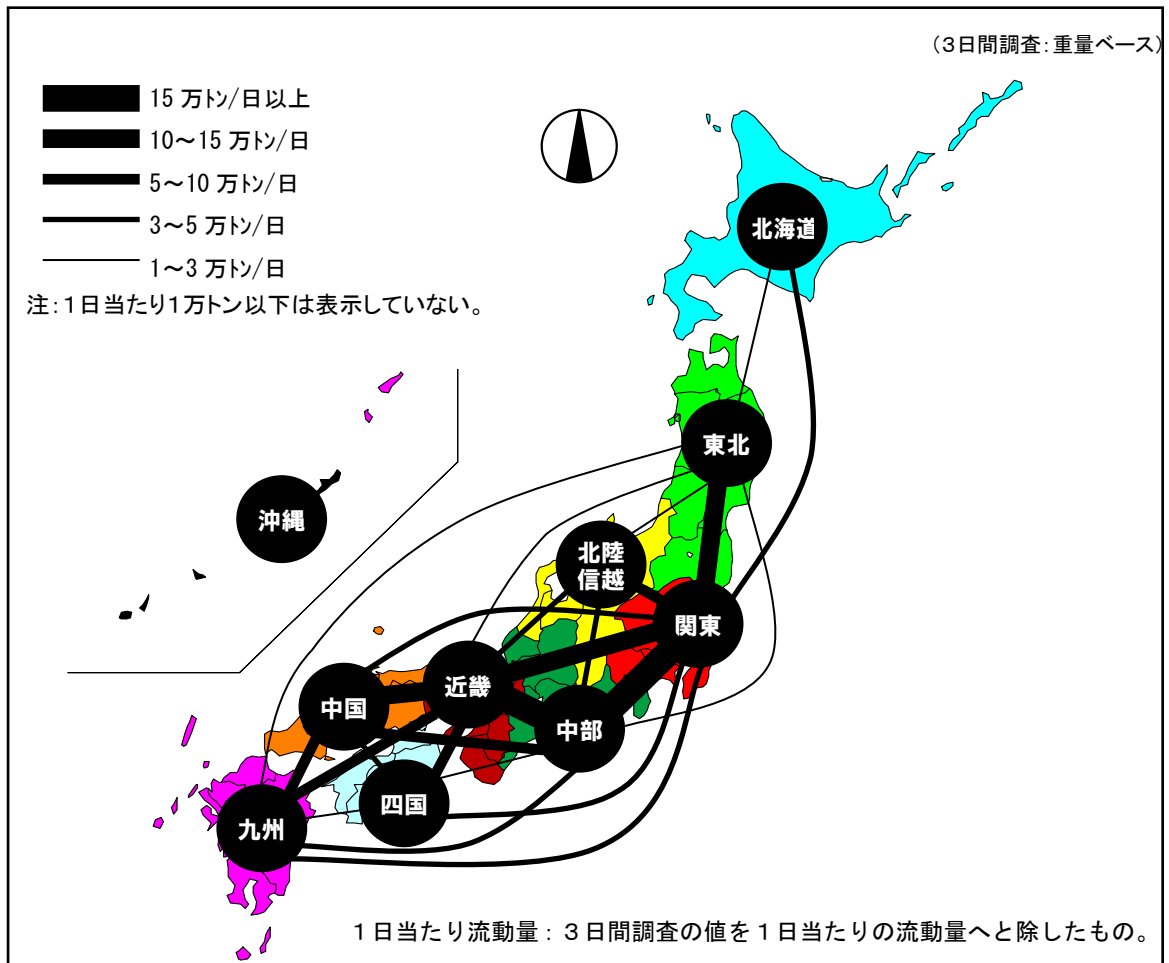


図6 2021年調査における主な地域間貨物流動（1日当たり流動量）

3. 代表輸送機関^{※1}別にみた流動量

代表輸送機関の分担状況（「その他^{※2}」を除く）をみると、2021 年調査では、トラックが 85.5%を占めており、これまでに引き続きトラックの分担率が高くなっています。また、トラックの中での営業用トラックのシェアは拡大傾向です。

海運に関しては、2021 年調査のその他船舶（コンテナ船・RORO船を除く船舶）のシェアが、2015 年調査より縮小し 12.0%となっています。

主な長距離流動区間における輸送機関分担について、調査年別に整理しています。これまでの調査結果からも、「関東・近畿・中部→北海道」の流動ではフェリー・コンテナ船・RORO船のシェアが高く、「関東・近畿・中部→九州」の流動では、トラックのシェアが高い傾向が見られます。

※1 代表輸送機関：発地から着地までの間で最も長い距離を輸送した輸送機関

※2 その他：パイプライン、ベルトコンベア、自動車・船舶の自走等

※図 7 の回答行数においては、その他を除外しているため、図 5 の回答行数と異なっております。

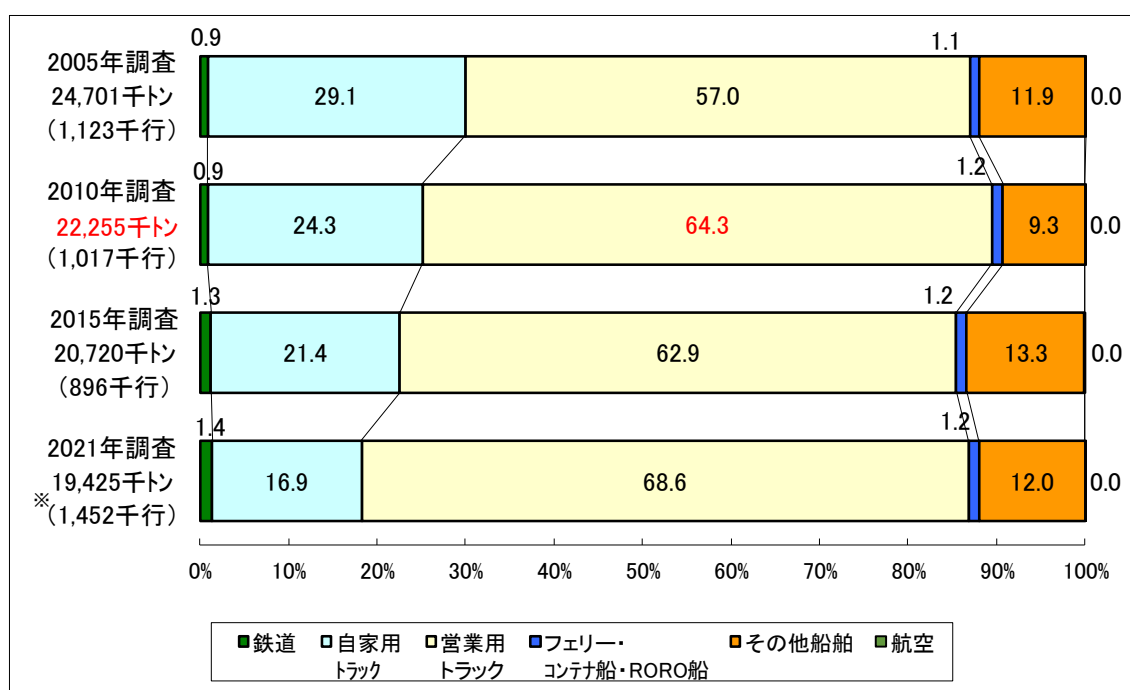


図 7 3 日間流動量の輸送機関分担

第11回全国貨物純流動調査（物流センサス）の調査結果（速報）

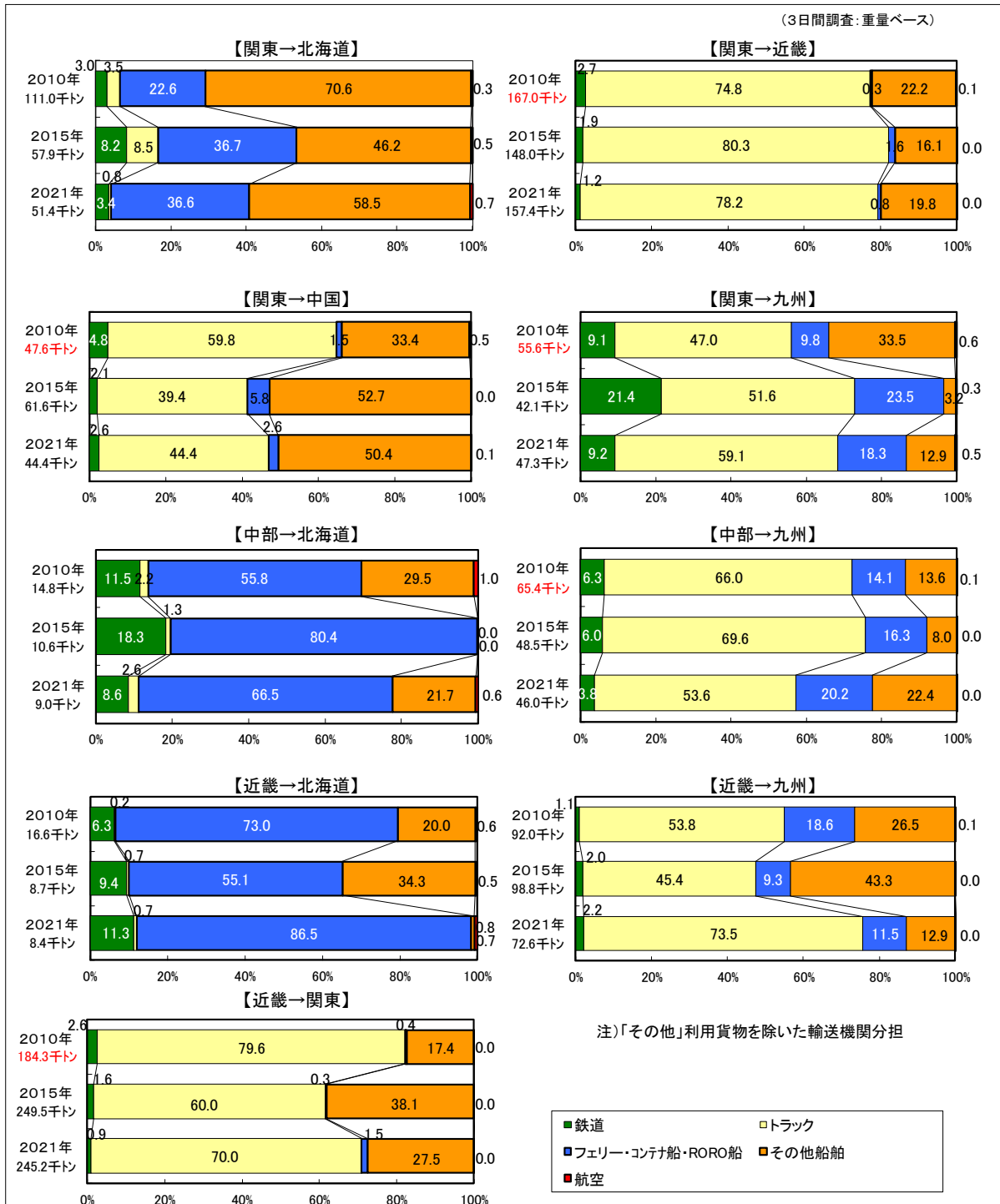


図8(1) 主な長距離流動区間における輸送機関分担

【補足】

輸送機関のうち「その他船舶」とは、主にタンカーなどバラ貨物を輸送する大型船舶を指しますが、出荷1回で大量の貨物を輸送するため、調査対象日3日間における出荷の有無で、輸送機関分担がかなり異なる場合があります。

図8(1)では、【関東→北海道】などがこれに該当します。そこで、長距離輸送で競合輸送機関となりうる鉄道、トラック、フェリー・コンテナ船・RORO船のシェアの変化がわかるように、「その他船舶」を除いて輸送機関分担を示したものが図8(2)です。

第11回全国貨物純流動調査（物流センサス）の調査結果（速報）

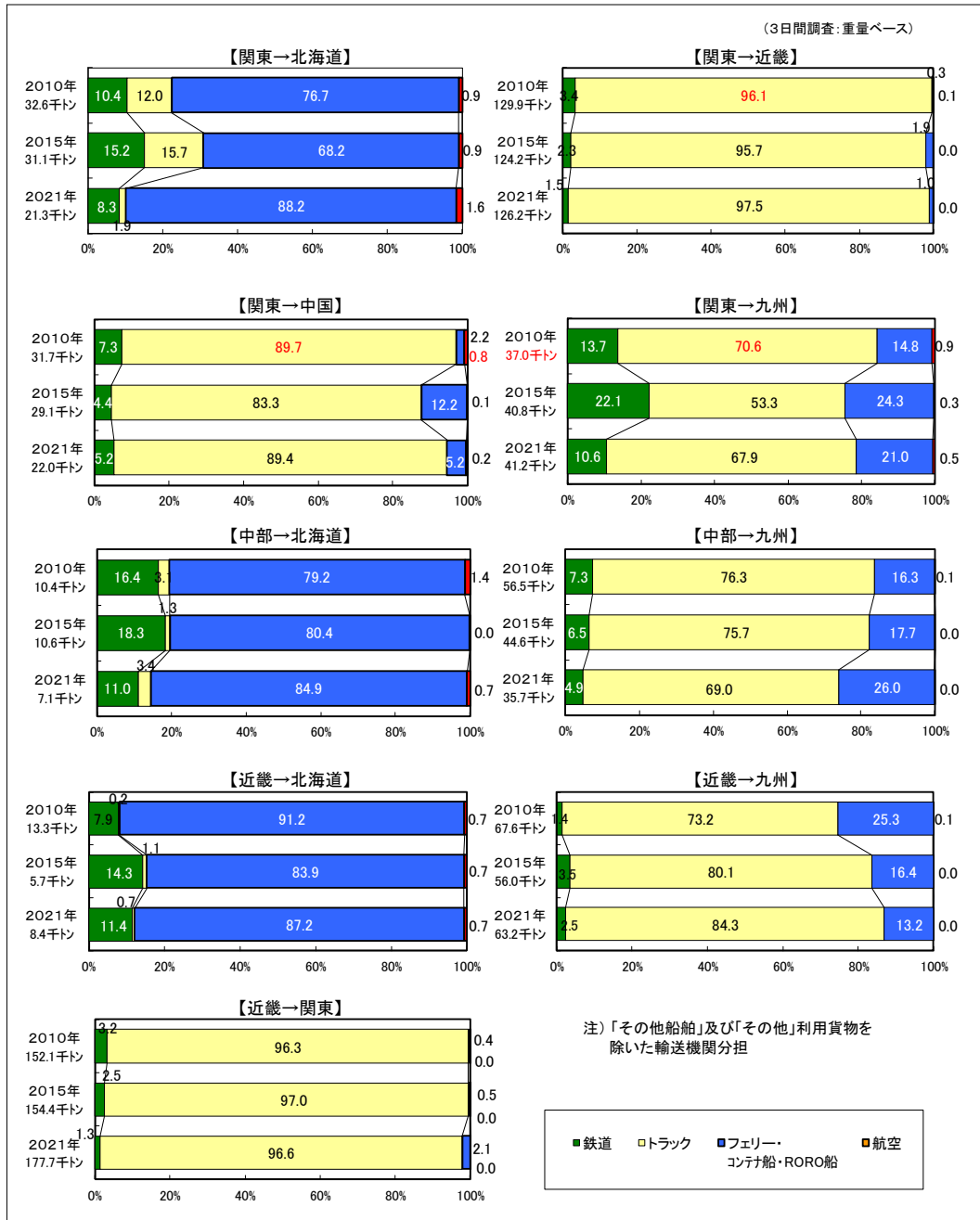


図8(2) 主な長距離流動区間における輸送機関分担（「その他船舶」利用貨物を除く）

参考：集計回答行数（図8）

（単位：行）

	図8(1) 「その他」を除く 代表輸送手段			図8(2) 「その他船舶」及び「その他」 を除く代表輸送手段		
	2010年	2015年	2021年	2010年	2015年	2021年
関東→北海道	7,134	5,786	10,867	7,112	5,747	10,838
関東→近畿	32,674	23,619	52,829	32,605	23,523	52,783
関東→中国	9,475	7,290	14,638	9,452	7,256	14,624
関東→九州	13,241	10,520	20,006	13,226	10,465	19,997
中部→北海道	2,561	2,225	3,848	2,558	2,225	3,801
中部→九州	8,338	7,816	10,992	8,282	7,807	10,978
近畿→北海道	2,120	2,135	1,972	2,048	2,110	1,966
近畿→九州	9,357	11,097	11,471	9,290	10,990	11,374
近畿→関東	24,961	28,889	27,922	24,888	28,752	27,827

4. 出荷1件当たりの貨物量（流動ロット）

2021年調査での4産業計の出荷1件当たりの貨物量（流動ロット）は、平均0.70トン/件です。4産業計の流動ロットは2015年調査で小ロット化が下げ止まりする傾向が見られましたが、2021年調査では2010年調査以前と同様に小ロット化の傾向となりました。

産業別にみると、いずれの産業でも小ロット化していますが、2021年調査では特に鉱業で小ロットになっています。

代表輸送機関別にみると、2010年調査以降トラックは小ロット化が進んでいます。また、他の代表輸送機関でも、コンテナ船とその他船舶を除いて、2015年調査に比して流動ロットが小さくなっています。

品類別にみると、軽工業品と**特殊品**では流動ロットが反転し拡大していますが、**他の品類**では小ロット化となっております。

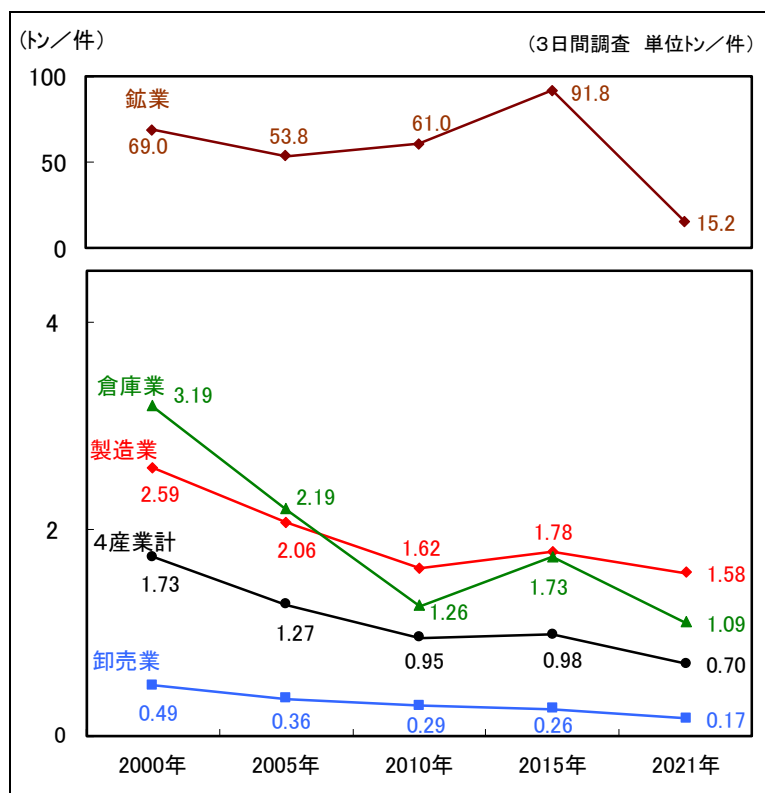


図9 発産業別の流動ロット

参考：集計回答行数（図9）

（単位：行）

	2000年	2005年	2010年	2015年	2021年
鉱業	16,789	10,893	9,211	5,919	7,025
製造業	596,041	673,198	589,922	557,589	737,338
卸売業	226,392	224,316	166,698	155,200	279,536
倉庫業	146,772	218,138	254,144	179,768	438,013
4産業計	985,994	1,126,545	1,019,975	898,476	1,461,912

【補足】

今回の回答行数の大幅な増加は、電子回答を主体にしたことに伴い3日間調査における出荷実績の回答がデータベース等から電子的に抽出され回答しやすくなったとみられます。

第11回全国貨物純流動調査（物流センサス）の調査結果（速報）

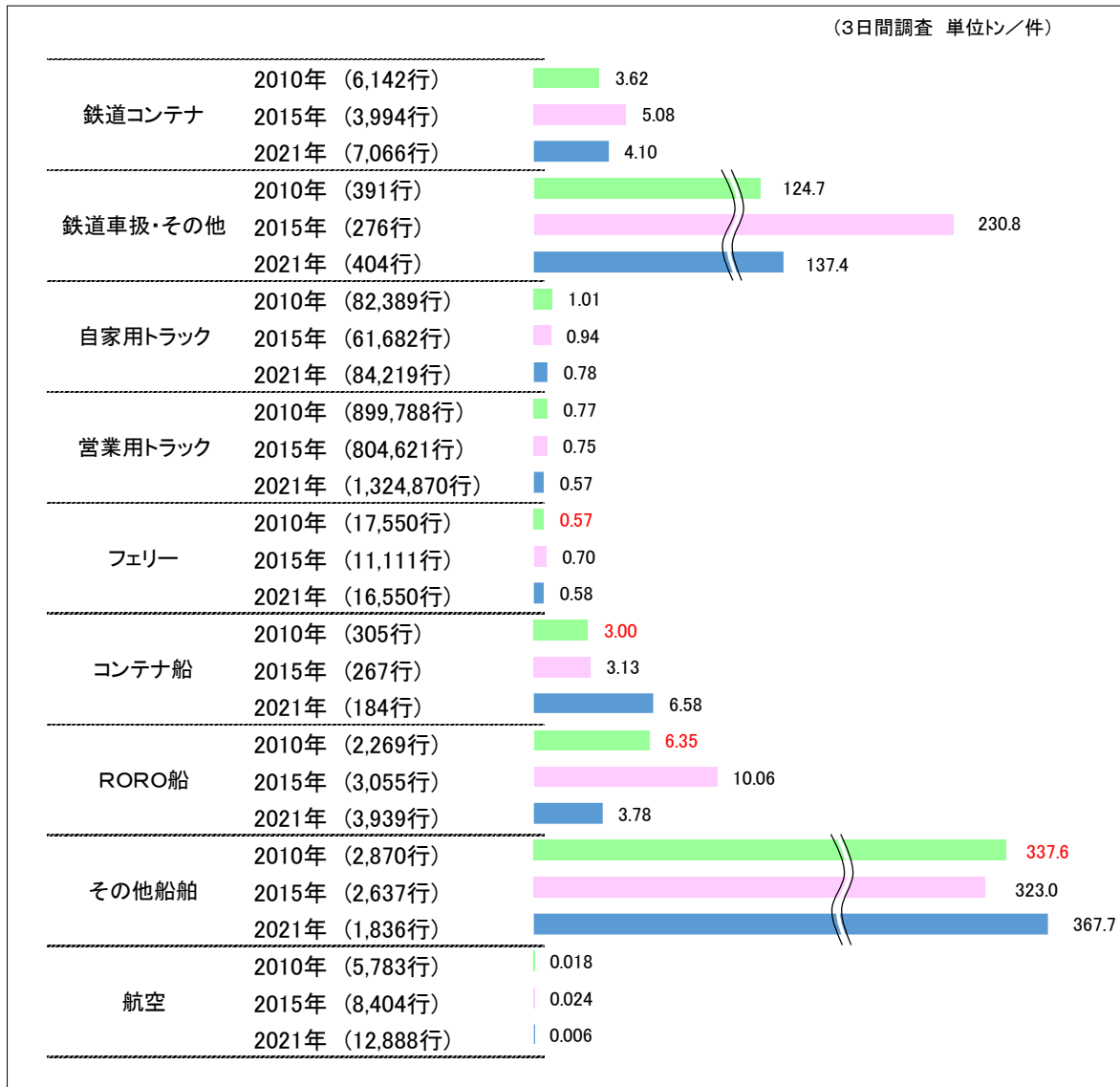


図10 代表輸送機関別の流動ロット

第11回全国貨物純流動調査（物流センサス）の調査結果（速報）

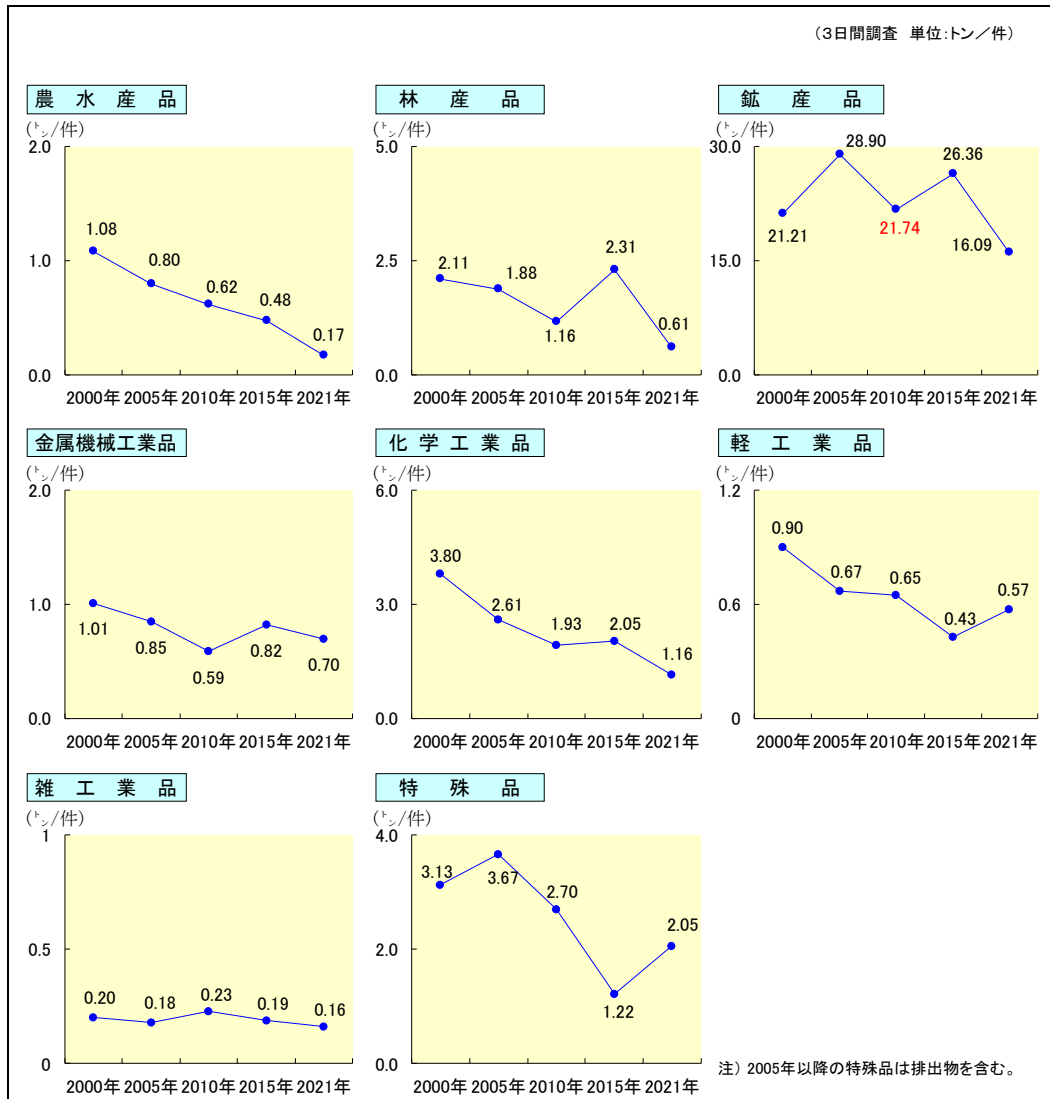


図11 品類別流動ロット

参考：集計回答行数（図11）

（単位：行）

	2000年	2005年	2010年	2015年	2021年
農水産品	57,431	64,173	62,234	55,227	84,917
林産品	5,453	5,079	3,581	3,986	4,834
鉱産品	21,070	15,104	12,599	10,230	12,676
金属機械工業品	329,149	338,171	297,523	262,195	428,956
化学工業品	209,674	241,695	210,230	233,020	369,436
軽工業品	170,347	221,260	203,514	111,911	267,425
雑工業品	173,080	215,734	208,584	190,224	265,194
特殊品	19,790	25,329	21,710	31,683	28,474
全品類計	985,994	1,126,545	1,019,975	898,476	1,461,912

注：特殊品には排出物を含む。

5. 代表輸送機関の選択理由

全国貨物純流動調査では、2010年調査から新たに「代表輸送機関の選択理由（複数回答可）」を調査しています。

輸送機関（計）でみると、2021年調査では、「輸送コストの低さ（45.4%）」、「届先地に対して他の輸送機関がない（34.9%）」、「到着時間の正確さ（28.3%）」の順に比率が高くなっています。

輸送機関別にみると、2021年調査では、いずれの輸送機関でも「輸送コストの低さ」が最も多い回答となっています。それに次ぐ回答では、トラックでは「届先地に対して他の輸送機関がない」、鉄道コンテナでは「環境負荷の小ささ」、海運では「出荷1件あたり重量に適合」が挙げられています。

2015年調査と今回の2021年調査と比較すると、ほぼ同様な回答傾向ですが、全般的に「出荷1件あたり重量に適合」の回答率がやや高まっています。

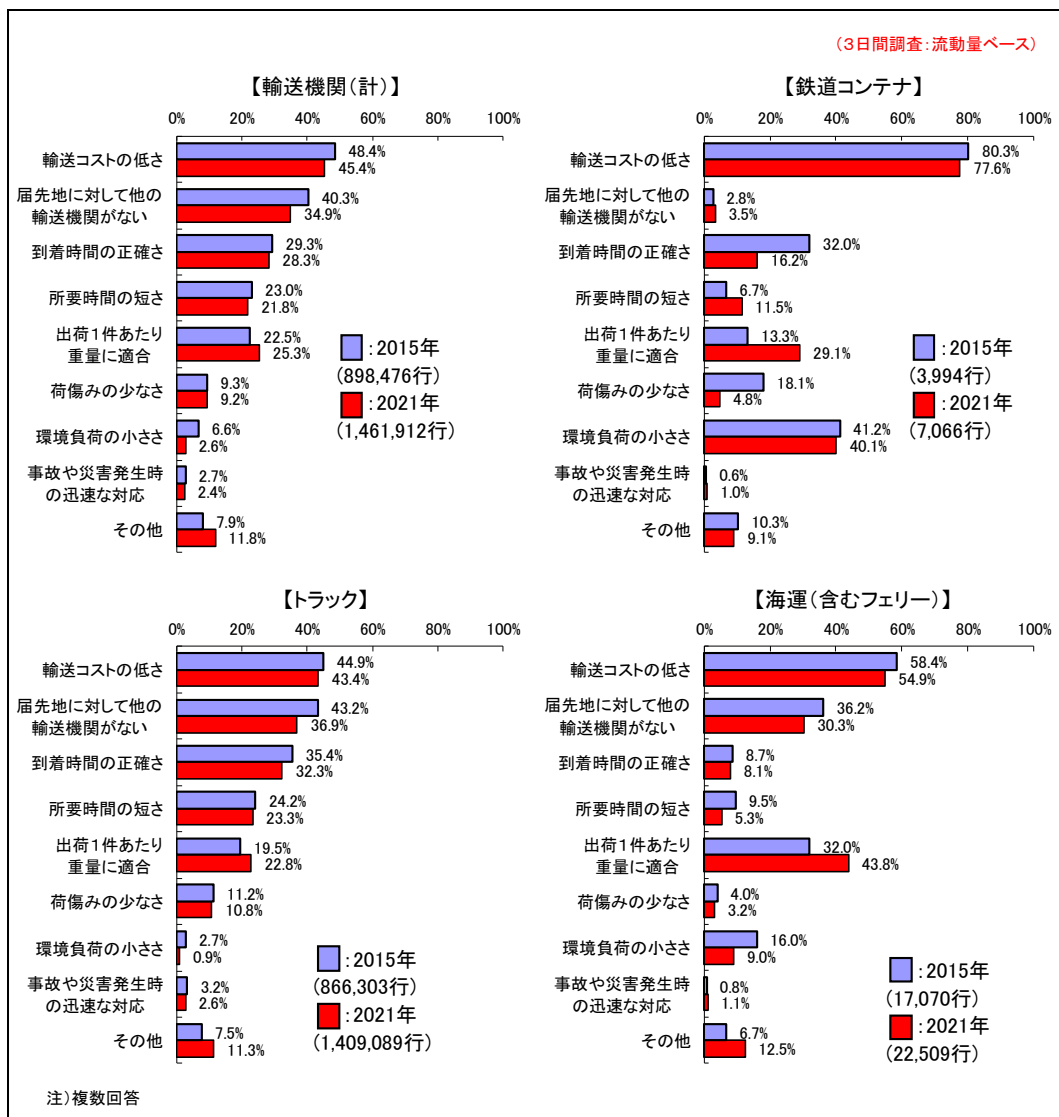


図12 代表輸送機関の選択理由

【図12の数値等について】

・流動量ベース：選択理由の回答を単に1件としてカウントをせずに、1件あたりの回答に流動量で重み付けをしたもの。このため、例えば、流動量大きい回答が選択した選択理由が数値に大きく反映される。

第11回全国貨物純流動調査（物流センサス）の調査結果（速報）

調査概要

（1）調査対象産業

第11回全国貨物純流動調査では、対象地域は全国とし、調査対象産業は貨物の出荷量の多い鉱業、製造業、卸売業、倉庫業の4産業としています。また、貨物流動を出荷地点単位で補足する目的から、企業単位ではなく事業所単位に調査を実施しています。

（2）調査の種類

本調査では、調査対象事業所に対して、「年間輸送傾向調査」と「3日間流動調査」の2種類の調査を実施しています。

「年間輸送傾向調査」では、2020年4月から2021年3月までの年度1年間における貨物の出入荷量および輸送実態の概略を調査しています。

「3日間流動調査」は、2021年10月21日（火）から23日（木）までの3日間の出荷貨物について、出荷1件ごとに詳細な貨物の流動を調査したものです。

（3）調査対象事業所数

本調査の調査対象事業所は64,947件で、廃業等を除いた有効調査対象事業所数は62,293件です。有効調査対象事業所数に対する回収率は34.0%（前回：36.5%）で、21,191件を回収、うち19,628件を集計対象としています（倉庫業を倉庫種別・所在市区町村で事業所分割する前時点の事業所数）。

品類分類表

品類	内容例
農水産品	麦、米、雑穀・豆（とうもろこし、大豆等）、野菜・果物、羊毛、その他の畜産品（牛肉、鶏卵、ペット動物等）、水産品（魚介類、海藻等）、綿花、その他の農産品（花き、葉たばこ、さとうきび、芝生など）
林産品	原木（製材用原木、丸太等）、製材、薪炭、樹脂類（天然ゴム等）、その他の林産品（木材チップ、苗木等）
鉱産品	石炭、鉄鉱石、その他の金属鉱物（マンガン鉱、銅鉱等）、砂利・砂・石材、原油・天然ガス、りん鉱石、石灰石、原塩（岩塩等）、その他の非金属鉱物（けい砂、陶土、耐火粘土等）
金属機械工業品	鉄鋼（鉄鉄、粗鋼、鋼管等）、非鉄金属（銅などの線材・板、電線ケーブル、光ファイバーケーブル等）、金属製品（鉄骨、サッシ、木工道具、鋳物等）、産業機械（ボイラ、エンジン、農業用機械、印刷機械、半導体製造装置、パルプ類等）、電気機械（発電機、家電製品、パソコン、IC等）、自動車、自動車部品、その他輸送機械（鉄道車両、自転車、フォークリフト等）、精密機械（計量器、時計、医療用機械等）、その他機械（事務用機器、自動販売機、温水暖房装置等）
化学工業品	セメント、生コンクリート、セメント製品、ガラス・ガラス製品、陶磁器（タイル、浴槽等）、その他の窯業品（レンガ、瓦、耐火ボード等）、重油、揮発油、その他石油（灯油、潤滑油等）、LNG・LPG、その他の石油製品（石油アスファルト等）、コークス、その他石炭製品（練炭等）化学薬品（無機工業薬品、高圧ガス等）、化学肥料、染料・顔料・塗料、合成樹脂、動植物性油脂（大豆油、ろうそく等）、その他の化学工業品（化粧品、医薬品、農薬、印刷インキ等）
軽工業品	パルプ、紙（板紙、段ボール原紙等）、糸（化学繊維糸、紡織半製品等）、織物（ニット生地、絹織物、漁網等）、砂糖、その他の食料工業品、飲料
雑工業品	書籍・印刷物・記録物（新聞、書籍、記録済みDVD等）、がん具、衣服・身の回り品（下着、外衣、寝具、靴、カーペット、宝飾品等）、文房具・運動娯楽用品（筆記用具、紙製品、運動競技用品、楽器等）、家具・装備品（たんす、ベッド、キャビネット等）、その他の日用品（温水器、石油ストーブ、家庭用調理器具、食卓用品、その他日用雑貨）、木製品（合板、建具、新建材等）ゴム製品（タイヤ、ゴムホース等）、その他の製造工業品（皮革製品、医療用品等）
排出物（使用済み製品、循環資源、産業廃棄物）	廃自動車、廃家電、金属スクラップ（有価の金属くず等）、金属製容器包装廃棄物（使用済み缶等）、使用済みガラスびん、その他容器包装廃棄物（使用済みのペットボトル・飲料用紙パック等）、古紙、廃プラスチック類、燃え殻（石炭がら等）、汚泥、鉱さい、ばいじん、その他の産業廃棄物（廃油、繊維くず、コンクリートくず、廃タイヤ等）
特殊品	動植物性飼肥料（牧草、配合飼料等）、金属製輸送用容器（コンテナ、ドラム缶等）、その他の輸送用容器（段ボール箱、木箱等）、取り合わせ品（各種商品積合せ等）

第 11 回全国貨物純流動調査（物流センサス）の調査結果（速報）

国土交通省



全国貨物純流動調査
年間輸送傾向調査票（鉱業、製造業、卸売業）（令和 2 年 4 月～3 年 3 月）

ご記入にあたっては、「回答の手引」をご参照下さい。

問 1-1. 貴事業所に関してご記入下さい。

事業所名	従業者数 (令和 3 年 9 月末日現在)	人	出荷額または販売額 (令和 2 年 4 月～令和 3 年 3 月) 製造業と卸売業が該当します。 消費税抜きでご記入下さい。	百万円	物流関係 担当部門	部	課
所在地 Tel. (市外局番) - () - ()	敷地面積 (令和 3 年 9 月末日現在)	m ²	現在の所在地 で操業を開始 した年	大正以前・昭和・平成・令和 年 (年については昭和34年以前は具体的年の記入はありません)	ご回答者 氏名		

問 1-2. 令和 2 年度中に貴事業所では、事業所所在地において貨物の出・入荷を行いましたか。該当する番号を○印で囲んで下さい。
なお、「2」に該当する場合には、以下の項目にお答えいただくことなく結構です。

1 貨物の出・入荷を行った。	2 貨物の出・入荷を行っていない。
----------------	-------------------

問 2. 令和 2 年度における貨物の出荷・入荷について、品別別にそれぞれの重量（実重量）をご記入下さい。
次に、出荷については、品別ごとの輸送機関別重量割合（%……小数点以下四捨五入）をご記入下さい。
また、品別ごとの輸出トン数、輸入トン数をご記入下さい。

品 類 「品類・品目分類表」の品 類を参考して下さい。	重 量 (トン)	うち輸出 (トン)	輸 送 機 関 利 用 状 況 (%)						
			合 計	鉄 道	自 家 用 トラック	営 業 用 トラック	海 運	航 空	そ の 他
出			100%						
荷			100%						
			100%						
			100%						
			100%						
合 計			100%						

品 類 「品類・品目分類表」の品 類を参考して下さい。	重 量 (トン)	うち輸入 (トン)
荷		
合 計		

輸送機関
① 2 つ以上の輸送機関で積替え輸送された場合は、その中で最も輸送距離の長い輸送機関を、それぞれの出荷の輸送機関とみなして下さい。
② 輸出の場合は、貴事業所から輸出港湾または輸出空港までの輸送で、最も輸送距離の長いものを、それぞれの出荷の輸送機関とみなして下さい。ただし、貴事業所内の専用埠頭から輸出した場合の利用輸送機関は、「その他」として下さい。
③ トラック、トレーラーなどによる輸送において、一部の区間でフェリーを利用しても（被牽引車のみを含む）、輸送機関はトラックとします。
④ 営業用トラックとは、運送業者に委託するトラック輸送を指します。
⑤ その他とは、パイプライン・ベルトコンベア・自走など、鉄道・自家用トラック・営業用トラック・海運・航空以外の輸送機関を指します。

問 4. 問 2. の出荷合計重量を 100 とした場合の貨物の出荷先地別重量割合（%：小数点以下四捨五入）をご記入下さい。

出荷先地	重量割合	出荷先地	重量割合
1 北海道		25 滋 賀	
2 青 森		26 京 都	
3 岩 手		27 大 阪	
4 宮 城		28 兵 庫	
5 秋 田		29 奈 良	
6 山 形		30 和 歌 山	
7 福 島		31 鳥 取	
8 茨 城		32 鳥 根	
9 栃 木		33 岡 山	
10 群 馬		34 広 島	
11 埼 玉		35 山 口	
12 千 葉		36 徳 島	
13 東 京		37 香 川	
14 神 奈 川		38 愛 媛	
15 新 潟		39 高 知	
16 富 山		40 福 岡	
17 石 川		41 佐 賀	
18 福 井		42 長 崎	
19 山 梨		43 熊 本	
20 長 野		44 大 分	
21 岐 阜		45 宮 崎	
22 静 岡		46 鹿 児 島	
23 愛 知		47 沖 縄	
24 三 重		合 計	100%

出荷先地・輸出貨物については、輸出港湾・輸出空港の所在都道府県を届先地としてご記入下さい。

問 3. 出荷・入荷（国内輸送）に際して、鉄道・海運・航空および高速道路を利用している場合、その主な利用鉄道貨物駅、港湾、空港、インターチェンジ名をご記入下さい。
また、輸出入を行っている場合、その主な輸出（入）港、輸出（入）空港名をご記入下さい。

① 出荷・入荷（国内輸送）に伴う利用施設

区分	施設			
	鉄道貨物駅	港 湾	空 港	高速道路 インターチェンジ
出 荷				
入 荷				

② 輸出入に伴う利用施設

区分	施設	
	港 湾	空 港
輸 出		
輸 入		

※ 都道府県No.	業 種 No.	事業所 No.

(※印は記入しないで下さい)

第 11 回全国貨物純流動調査（物流センサス）の調査結果（速報）



全国貨物純流動調査
年間輸送傾向調査票（倉庫業）（令和 2 年 4 月～3 年 3 月）

国土交通省

所管する倉庫が 2 つ以上ある場合は、倉庫種別または倉庫所在地の市区町村が異なるごとに調査票をかえてご記入下さい。
ご記入にあたっては、「回答の手引」をご参照下さい。

問 1. 貴事業所・対象倉庫に関してご記入下さい。

事業所名	対象倉庫従業員数 (令和 3 年 9 月末日現在)	人	対象倉庫の面積 (平成 27 年 9 月末日現在)	1 類・2 類・3 類倉庫	m ²	冷蔵倉庫	m ²	
事業所所在地	対象倉庫敷地面積 (令和 3 年 9 月末日現在)	m ²	ご回答いただく対象倉庫の みの面積をご記入下さい。	危険品倉庫	建屋	m ²	野積倉庫	m ²
対象倉庫所在地	現在所在地で 操業を開始した年	年		貯蔵そう倉庫	タンク	m ²	水面倉庫	m ²
Tel. (市外局番) - () - ()		都道 府県 市 区 町村	大正以前・昭和・平成・令和 (年については昭和 04 年以前は具体的年の記入の必要はありません)	ご回答者氏名				

問 2. 令和 2 年度における入庫・出庫高（突重量）をご記入下さい。
次に、出庫に際しての輸送機関別重量割合（%……小数点以下四捨五入）をご記入下さい。

品 類 「品類・品目分類表」の品 類を参考にして下さい。	入庫高（トン）	出庫高（トン）	輸送機関利用状況（%）						
			合計	鉄道	家用 トラック	営業用 トラック	海運	航空	その他
農 水 産 品			100%						
林 産 品			100%						
鉱 産 品			100%						
金属機械工業品			100%						
化学工業品			100%						
軽工業品			100%						
雑工業品			100%						
排 出 物			100%						
特 殊 品			100%						
合 計									

問 3. 入庫・出庫（国内輸送）に際して、鉄道・海運・航空および高速道路を利用している
場合、その主な利用鉄道貨物駅、港湾、空港、インターチェンジ名をご記入下さい。

施設	鉄道貨物駅	港 湾	空 港	高速道路 インターチェンジ
入 庫				
出 庫				

輸送機関
① 2 つ以上の輸送機関で種替え輸送された場合は、その中で最も輸送距離の長い輸送機関を、それぞれの出荷の輸送機関とみなして下さい。
② 輸出の場合は、貴事業所から輸出港または輸出空港までの輸送で、最も輸送距離の長いものを、それぞれの出荷の輸送機関とみなして下さい。ただし、貴事業所内の専用埠頭から輸出した場合の利用輸送機関は、「その他」として下さい。
③ トラック、トレーラーなどによる輸送において、一部の区間でフェリーを利用しても（被牽引車のみを含む）、輸送機関はトラックとします。
④ 営業用トラックとは、運送業者に委託するトラック輸送を指します。
⑤ その他とは、パイプライン・ベルトコンベア・自走など、鉄道・家用トラック・営業用トラック・海運・航空以外の輸送機関を指します。

問 4. 問 2. の出庫高合計重量を 100 とした場合の貨物の届先地別重量割合（%：小数点以下四捨五入）をご記入下さい。

届先地	重量割合	届先地	重量割合
1 北海道		25 滋 賀	
2 青 森		26 京 都	
3 岩 手		27 大 阪	
4 宮 城		28 兵 庫	
5 秋 田		29 奈 良	
6 山 形		30 和 歌 山	
7 福 島		31 鳥 取	
8 茨 城		32 島 根	
9 栃 木		33 岡 山	
10 群 馬		34 広 島	
11 埼 玉		35 山 口	
12 千 葉		36 徳 島	
13 東 京		37 香 川	
14 神奈川		38 愛 媛	
15 新 潟		39 高 知	
16 富 山		40 福 岡	
17 石 川		41 佐 賀	
18 福 井		42 長 崎	
19 山 梨		43 熊 本	
20 長 野		44 大 分	
21 岐 阜		45 宮 崎	
22 静 岡		46 鹿 児 島	
23 愛 知		47 沖 縄	
24 三 重		合 計	100%
		うち外国	

※ 都道府県 No. 業 種 No. 事業所 No.

(※印は記入しないで下さい)

